

Essays on Economic Theory of Underdevelopment Traps

ピセ, セイン

<https://doi.org/10.15017/1654638>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（経済学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	Peseth Seng (ピセ セイン)		
論 文 名	Essays on Economic Theory of Underdevelopment Traps (低開発の罠に関する経済理論研究)		
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授 堀 宣昭
	副 査	九州大学	准教授 瀧本 太郎
	副 査	九州大学	准教授 宮崎 毅

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、経済発展と低開発の罠に関連するいくつかのテーマについて理論的分析を行っている。第1章は論文全体の概説、第2章は経済発展の政治経済学に関する理論的文献のサーベイとなっている。

第3章は、近年、途上国間での直接投資が増大傾向にあることを踏まえ、これが資源輸出国で問題となる「資源の呪い」とどのような関係を持つのか、理論モデルを用いて分析している。資源輸出国が腐敗した経済制度環境（レント・シーキングなど）下にある場合、そのような環境に慣れた途上国企業から資源部門への直接投資を受け入れると、「資源の呪い」をかえって悪化させる可能性があることを示している。

第4章では、Bisin and Verdier (*Journal of Economic Theory*, 2001)などによる世代間文化継承の動学モデルを応用して、企業の生産モードと社会資本（信頼に基づいた行動）との相互発展の過程を分析している。資源ブームなどで、社会資本の発展を必要としない伝統的な生産モードの生産性が一時的に上昇し、企業がこれを採用するようになると、近代的な生産モードと親和的な社会資本の形成が阻害ないし破壊され、ブーム後の経済発展の罠の原因となることが示される。

第5章は、政治的プリンシパル・エージェントモデルを用いて、政治家の腐敗の持続性について分析している。「現職政治家が一部の利益団体と癒着して非効率な政策やプロジェクトを採用している」と有権者が想定するほど、現職政治家も非効率な政策を選択するコストが小さくなる。非効率な政策を選択しても、それが政治家の政策判断能力自体についての **bad signal** とならないからである（優秀な政治家でも汚職により非効率な政策を選択することになるから）。この結果、有権者が非効率な政策を選択した政治家の再選に寛容となり、有権者の当初の期待が自己実現的となるメカニズムが示される。

第6章は本論文の主要結果の要約で、政策インプリケーションや将来の研究の方向性が示されている。

本論文は、特に社会資本の形成の失敗や人々の期待の調整の失敗など、途上国が低開発の罠に陥る原因とその深刻性について、より根源的な問題に踏み込み、ある程度有効な理論的説明を提供することに成功しており、一定の独創的な貢献と認められる。

以上の点から、本論文調査会は、Peseth Seng 氏から提出された論文“Essays on Economic Theory of Underdevelopment Traps”を博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。